

食行動からみた養育条件と発達に関する研究

1. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関係
2. 遊び食べについての行動分析

(分担研究：小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究)

八倉巻和子¹⁾，大場幸夫¹⁾，村田輝子¹⁾，森岡加代¹⁾，
芦田美保子¹⁾，水野清子²⁾，大森世都子³⁾，高石昌弘⁴⁾

要約：

1. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関係

1歳6カ月から1歳10カ月児を持つ母親159名を対象に、食事行動に関する訴えの実態を調査し、生活リズム、子どもの情緒および母親の養育機能との関連づけを試みた。

- ① 食事に関する訴えが全くない児は22.0%，何らかの訴えを持っている児は78.0%である。
- ② 訴えのうち、遊び食べが最も多く、次にむら食い、偏食である。
- ③ 生活・食事リズムの不安定な者に、訴え率が高い。
- ④ 訴えが全くない児は情緒が安定している。
- ⑤ 児の訴えの発現に母親の養育機能が影響を及ぼしている。

2. 遊び食べについての行動分析

幼児期にみられる遊び食べの行動を分析するため、保育所と家庭における食事場面を、観察すると同時にビデオで収録し、行動の分析と意味の分析を行った。

1) 遊び食べの行動分析

食事時間を「食べる」「遊び」「その他」の行動に分類して検討した。

- ① 1回の食事の所要時間は、月齢が進むにしたがい「食べる」行動に要する時間が長くなり、「遊び」行動は減少している。
- ② 手指の機能発達については、16カ月時の対象児3名のうち2名は両手で食べ、スプーン・フォークが使える。1名は両手で食べられるがスプーン・フォークを使えない。
- ③ 「食べる」行動については、片手で食べているときは「食べる」行動が分断され、両手で食べられるようになるとその行動が集約する。
- ④ 「遊び」の行動については、片手で食べているときには、手をふる、よそ見をするなどがみられる。両手で食べられるようになると、つまむ、こねる、食器から食べ物を出し入れするなどがみられる。

1) 大妻女子大学家政学部 (Faculty of Home Economics, Otsuma Women's Univ.)

2) 日本総合愛育研究所 (Nippon Aiiku Research Institute for Maternal Child Health & Welfare)

3) 国立公衆衛生院母子保健学部 (Dept. of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health)

4) 国立公衆衛生院 (The Institute of Public Health)

2) 遊び食べの意味分析

<大人と子どもの相互関係>

- ① 子どもから大人に食べ物を差し出したとき、大人の受け止め方如何によって、食べる行動につながったり散らかし行動につながりやすい。
- ② 落とした物をその都度処理する場合は、大人と子どもの関わりが生じ、一斉に処理する場合は、関わりが生まれにくく食事と切り離される。
- ③ 子どもが食べ物を口に入れるとき、子どもの気持ちを優先する場合は、子どもの要求に対応して食べさせるやりとりがみられる。大人の気持ちを優先する場合は、子どもは首をふっていやがり、食べた物を出したりする行動がみられる。
- ④ 大人と子どもの関わり頻度や強度は、食事時の座る位置に影響される。

<物理的な要因による影響>

- ① 食事時の姿勢や動きなどの活動が自由な場合は、食べる行動から遊び行動へと移行しやすい。
- ② 食事の場に、食事と直接関わりはないが遊びのきっかけとなる物があつた場合、大人の働きかけによって食べることへの方向づけともなる。

<生活の脈絡から捉えた食事>

食事について、食前・食中・食後という区切りを大人が厳密にするかどうかで、子どもの食事への関わり幅は異なつたものとなる。

見出し語：幼児の食行動、遊び食べ、養育条件

はじめに

これまで、幼児の食行動を母親からの訴えとして捉え、その行動項目や出現する年齢そして養育者との関わりについて検討してきた¹⁻²⁾。

訴えのあつた食行動の中で、各年齢にわたつてみられたのが“遊び食べ”であつた。“遊び食べ”については、食物を通して生活の体験をするという見方³⁾と食物より他のものに興味がある場合に起こる行為として問題視される⁴⁾な

ど指導書によって異つた見解が示されている。

本調査においては、母親が“遊び食べ”を問題として訴えているだけに、保健指導上幼児の発達行動における“遊び食べ”の位置づけを明確にし、その指導のあり方を指示する必要があると思われる。

本年度は以上の視点から幼児の食行動について、養育機能との関連と遊び食べの行動分析について研究を進めた。

1. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関係

水野清子

研究目的

幼児期の食事に関する母親からの主訴は、乳児期に比べ著しく多くなる。その主なものは遊び食い、むら食い、偏食、小食、食欲不振などである。これらの多くは幼児期にみられる自我の発達、発育速度の緩慢化現象によるところが大きいとされている。しかし、近年、若い母親の育児観や養育態度の変容が問題視されている中で、これらの主訴の発生に母親自身の養育態

度も何らかの関りを持っている可能性が考えられる。

そこで、食事に関する母親からの主訴の発生背景を母親の養育態度との関係から観察を行った。

調査対象および方法

愛育会保健指導部ではほぼ定期的に健診を受けている1歳6カ月から1歳10カ月児を持つ母親を対象に、児の食事に関する主訴、生活背景、

母親の養育機能などについて、アンケート方式により調査した。

調査対象の概要を表1に示す。調査対象数は159名(回収率76.8%)で、対象の72.3%は第1子で、87.4%は核家族である。

表1 調査対象

		実数 (人)	比率 (%)
対象数	総数	159	100.0
	男	82	51.6
	女	77	48.4
出生順位	第1子	115	72.3
	第2子	31	23.3
	第3子	6	3.8
	双生児	1	0.6
家族形態	核家族	139	87.4
	複合家族	20	12.6

調査結果および考察

(1) 食事に関する母親からの主訴

日常の栄養相談の場で受ける母親からの主訴10項目を中心に、5段階尺度でその実態を調査した。

対象の中、主訴が全くない者は159名中35名(22.0%)で、78%の者は何らかの主訴を持っていた。各主訴に対し「そう思う、ややそう思う」者の割合をみると表2の通りで、遊び食い、むら食い、偏食、特定の食品だけを食べる、咀嚼、のろ食、小食に関する主訴率が高い。

表2 食事に関する母親からの主訴

	実数 (人)	比率 (%)
いやいや食べる	2	1.3
食事時の表情が何となく暗い	1	0.6
むら食いをする	71	44.9
少食である	29	18.2
好き嫌いがある	68	42.8
特定の食品だけを食べる	59	37.1
食べるのに時間がかかる	40	25.2
遊び食いをする	75	47.1
咀嚼に問題がある	42	26.7
間食を好み、食事を食べない	18	11.4

(2) 主訴の発生と家庭環境および生活背景

従来から小食、食欲不振は第1子に多いことが報告されている¹⁾。しかし、今回の調査結果からそのような傾向は観察されなかった。そこで家族構成との関係を前述の主訴率の高かった遊び食い、むら食い、偏食、特定のものを好む、咀嚼、のろ食、小食の7項目を中心に観察した。いずれの項目も核家族に比べ複合家族における児にこのような主訴が高率にみられ、特に遊び食い、特定のものを好む、小食に関して有意性が認められた($p < 0.05$)。従って育児に携わる者も祖父母の関わる割合が遊び食い、むら食い、特定のものを好む、のろ食、小食に関して高い傾向が観察された。一方、育児に保母やベビーシッターなどが関わっている児では遊び食い、むら食い、小食の訴えが少ない。このような主訴を幼児期にみられる特徴的な行動として客観的にとらえているか否かによって、このような相異が現れるのであろう。

次に個々の主訴の発現を生活リズム、食事リズムとの視点から観察した。起床時刻との関連をみると、遊び食い、むら食い、偏食、咀嚼、のろ食、小食は起床リズムが不定なものに発現率が高い傾向にあり、特に咀嚼とのろ食については有意性(いずれも $p < 0.05$)が認められた。また、就寝時刻とについてみると起床リズムと同様な傾向が観察され、のろ食以外の主訴は就寝時刻が不定な場合に発現率が高く、遊び食い、咀嚼に関する有意性(いずれも $p < 0.05$)が観察された。咀嚼の問題は近年、歯科保健の視点から関心を集めているが、起床・就寝時刻双方のリズムが関与することは興味深い。咀嚼の問題には児が食事を食べる意欲(食欲)が一部関与すると思われる。よい食欲を維持するためには生活リズムを整えることが基本的な要素であり、このような一連の関係から生活リズムが咀嚼に関する問題発生に関与しているのであろう。

さらに食事リズムと関連づけを行った結果を表3に示す。朝食、昼食、夕食および間食時刻のいずれもが、ここに示した7種類の主訴の発現に関与していることが観察された。即ち、食事および間食リズムが不定な者にこのような主

表3 主訴の有無と食事のリズム

(%)

主訴の種類	有無	朝食				昼食				夕食				間食			
		①	②	③	④	①	②	③	④	①	②	③	④	①	②	③	④
遊び食い	有	13.6	77.3	9.1	0	9.1	77.3	13.6	0	13.6	72.7	13.6	0	0	47.6	28.6	23.8
	無	30.4	69.6	0	0	26.1	65.2	8.7	0	39.1	56.5	4.3	0	17.4	56.5	8.7	17.4
むら食い	有	14.8	77.8	0	7.4	11.1	77.8	3.7	7.4	25.9	66.7	7.4	0	3.8	30.8	30.8	34.6*
	無	33.3	66.7	0	0	33.3	66.7	0	0	36.4	63.6	0	0	15.2	60.6	12.1	12.1
偏食	有	19.0	76.2	0	4.8	14.3	81.0	4.8	0	23.8	66.7	9.5	0	0	30.0	40.0	30.0
	無	44.0	56.0	0	0	44.0	56.0	0	0	48.0	52.0	0	0	16.0	60.0	8.0	16.0
特定のを好む	有	15.4	76.9	7.7	0	15.4	53.8	23.1	7.9*	15.4	76.9	7.7	0	0	16.7	50.0	33.3*
	無	25.9	74.1	0	0	29.6	70.4	0	0	33.3	66.7	0	0	14.8	55.6	11.1	18.5
咀嚼く	有	0	90.9	0	9.1	0	100.0	0	0	9.1	72.7	18.2	0**	0	45.5	27.3	27.3
	無	37.7	62.3	0	0	30.2	67.9	1.9	0	34.0	66.0	0	0	15.1	50.9	22.6	11.3
のろ食べ	有	21.4	57.1	14.3	7.1*	14.3	57.1	21.4	7.1	21.4	57.1	21.4	0*	7.1	14.3	35.7	42.9**
	無	25.6	74.4	0	0	30.2	65.1	4.7	0	30.2	67.5	2.3	0	14.0	60.5	14.0	11.6
小食	有	27.3	63.6	9.1	0	18.2	72.7	9.1	0	27.2	36.4	36.4	0***	0	36.4	45.4	18.2
	無	32.8	64.1	1.6	1.6	32.8	62.5	3.1	1.6	31.3	68.7	0	0	14.1	54.7	17.2	14.1

①：一定 ②：ほぼ一定 ③：やや不定 ④：不定

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

訴率が高く、特にむら食いには間食時刻が、特定のを好むという主訴には昼食と間食時刻、咀嚼くには夕食時刻、のろ食べには朝食、夕食および間食時刻、小食には夕食時刻のリズムが強く関与し、それぞれ間に有意性がみられた。このように児の生活や食事リズムを一定に整えることができるか否かは、母親の養育態度の善し悪しに一部帰するところがあるように思われる。

(3) 主訴の発生と児の情緒との関連性

昨年度、子どもの性格を活発、積極性、意欲、表情、情緒の5面を5段階尺度により調査し、主訴発現との関連づけを試みた。その結果、主訴が全くない子どもと主訴10項目中4種以上持つ者について子どもの性格を比較したところ、これらの主訴の発現に児の性格が一部関与していることが明らかにされた。そこで、今年度は情緒を中心に個々の主訴発現との関連づけを行った。その結果は図1のようで、遊び食い、むら食い、偏食、特定のを好むについては、これらの主訴が全くない者に比べ、有る者に情緒が安定している者の割合が低い傾向にあった。二木ら²⁾は1歳児の食欲、食事量、偏食の問題には子どもの気嫌が有意に関与していると報告

しているが、今回の調査では小食については明らかな差が観察されなかった。小食の問題は子どもの性格よりもむしろ食事リズムや子ども自身の体質が関与するのではないだろうか。

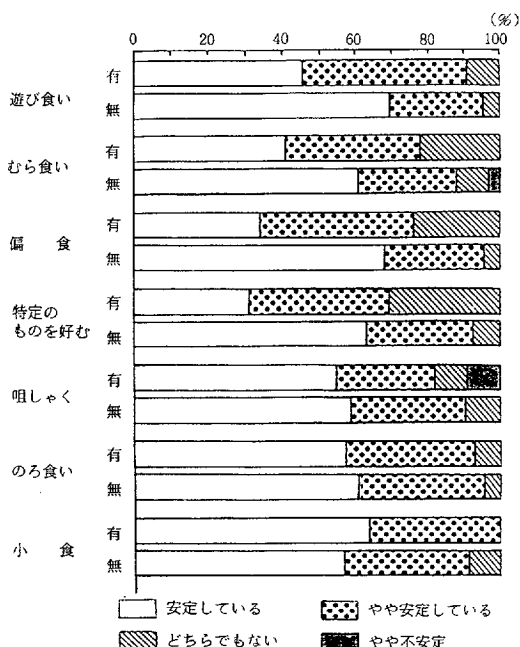


図1 主訴の有無と子どもの情緒との関係

(4) 主訴の発現に及ぼす母親の養育機能の影響

母親の養育機能を表4に示す10項目を基に3段階尺度で評価し、各項目に対し肯定的な回答をした者の割合を示す。

表4 母親の養育機能 (%)

養育	肯定的な者 (%)
ゆったりとした気分で子どもと過ごす時間が多い	39.9
子どもの気持や要求を上手にくみとっている	65.2
子どもの甘えや要求に応じることが多い	57.0
育児に不安や迷いはない	33.5
主人は育児に協力的	67.9
主人は育児について相談のってくれる	81.6
近所に育児のことを話し合う人がいる	78.6
育児は大変だが楽しい	85.5
子どもと上手に遊んでやれる	50.6
外で他の子どもと触れあう機会が多い	57.6

ゆったりとした気持で子どもと過ごす時間が多いという者は半数に満たないが、60%前後の者は子どもの気持や要求を上手にくみとっており、さらに子どもの甘えや要求に応じることが多い。育児に不安や迷いはないという者は33.5%とやや低率であるが、68~82%の者は育児に関する援助を主人から得ており、また、79%の者は近隣に育児に関する話相手があるという。そして約半数の母親は外で他の子どもと触れあう機会が多いと答え、また、子どもの上手な遊び相手になっている。

次に7種の食行動の発現と上述の母親の養育機能との関連づけを行った(表5)。

遊び食い、むら食い、偏食、特定のものを好む、咀嚼、のろ食べ、小食の主訴を持つ者は無い者に比べ、ゆったりとした気分で子どもと過ごすことが多い者、子どもの気持や要求を上手にくみとっている者の割合が低く、子どもの要求に応じる者の割合が高い傾向にあった。庄司ら³⁾の報告によると食事中母親がゆったりとした態度で対応している場合に、幼児の摂食

行動や摂食態度は良好であるという。

育児不安、育児に対する張合いの有意との関係を見ると、遊び食い以外の食行動の発現に母親のこれらの態度が関与しており、特にむら食い、偏食、のろ食べには育児不安の有意が、また、咀嚼には育児に対する張合いが明らかに影響を及ぼしていることが観察された。さらに子どもと上手に遊んでやれる場合にすべての食行動の発現率は低く、むら食い、偏食、のろ食べ、小食に関して有意性がみられた。これらの食行動の中、むら食い、小食の主張が無い者は有る者に比べ、外で他の子どもと触れ合う機会が有意に多い。

一方、育児に対する夫や近隣の人の支援の必要性が強調されている現在、これらの者のサポートを受けられる母親では、児の食事行動に関する主訴の発現率が低い傾向にあり、偏食、特定のものを好む、のろ食べ、小食の発現にこれらの支援の有無が有意に関与していた。

結語

1歳6カ月から1歳10カ月児を持つ母親159名を対象に、食行動に関する主訴の実態を調査し、生活リズム、子どもの情緒および母親の養育機能との関連づけを試みた。

約1/5~1/2の母親は遊び食い、むら食い、偏食、特定の食品を好む、咀嚼、のろ食べ、小食に関する訴えを持っていた。これらの主訴の発現に児の情緒、食事リズム、母親の養育機能が影響を及ぼしていることが示唆された。

文献

- 1) 武藤静子他：小児科臨床, 17(10):71, 1964.
- 2) 二木 武他：日本総合愛育研究所紀要, 27集:83, 1991.
- 3) 庄司順一他：日本総合愛育研究所紀要, 26集:99, 1990.

表5 食行動と母親の養育機能との関連性

(%)

		ゆったりとした気分 で子どもと過ごす ことが多い			子どもの気持ち ・要求を上手に くみとっている			子どもの要求に 応じることが多 い			育児不安はない			育児に張合いが ある		
		①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③
遊び食い	有	36.4	45.5	18.2	59.1	36.4	4.5	59.1	36.4	4.5	31.8	50.0	18.2	77.3	22.7	0
	無	50.0	40.9	9.1	77.3	13.6	9.1	47.8	39.1	13.0	34.8	47.8	17.4	91.4	4.3	4.3
むら食い	有	29.6	40.7	29.6	48.1	48.1	3.7	59.3	40.7	0	25.9	37.0	37.0*	81.5	14.8	3.7
	無	37.5	46.9	15.6	84.8	15.2	3.0	45.5	42.4	12.1	40.6	59.4	0	87.9	9.1	3.0
偏食	有	33.3	38.1	28.6	47.6	47.6	4.8	60.0	40.0	0	42.9	33.3	23.8*	80.8	14.3	4.8
	無	44.0	44.0	12.0	80.0	16.0	4.0	48.0	36.0	16.0	48.2	52.0	0	92.0	8.0	0
特定のものを好む	有	38.5	46.2	15.4	76.9	23.1	0	69.2	30.8	0	53.8	15.4	30.8	84.6	15.4	0
	無	44.4	44.4	11.1	81.5	18.5	0	48.1	44.4	7.4	44.4	48.1	7.4	92.6	7.4	0
咀嚼	有	27.3	45.5	27.3	54.5	36.4	9.1	54.5	18.2	27.3	27.3	63.6	9.1	54.5	36.4	9.1*
	無	48.1	36.5	15.4	75.0	21.2	3.8	49.1	41.5	9.4	43.4	49.1	7.5	88.7	9.4	1.9
のろ食べ	有	35.7	35.7	28.6	64.3	28.6	7.1	50.5	42.6	7.1	28.6	50.5	21.4*	71.4	28.6	0
	無	45.2	47.6	7.1	78.6	19.0	2.4	46.5	41.9	11.6	46.5	51.2	2.3	88.4	11.6	0
小食	有	45.5	36.4	18.2	54.5	45.5	0	72.7	27.3	0	36.4	36.4	27.3	72.7	27.3	0
	無	44.0	42.7	12.7	69.8	27.0	3.2	40.6	45.3	14.1	39.1	54.7	6.3	84.4	15.6	0

		子どもと上手に 遊んでやれる			外で他の子ども と触れ合う機会 が多い			主人は育児に協 力的である			主人は育児の相談 にのってくれる			近所に話し合え る人がいる		
		①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③
遊び食い	有	45.5	50.0	4.5	68.2	9.1	22.7	72.7	18.2	9.1	81.8	13.6	4.5	68.2	4.5	27.3
	無	72.7	22.7	4.5	68.2	18.2	13.6	78.3	21.7	0	82.6	17.4	0	91.3	0	8.7
むら食い	有	33.3	55.6	11.1***	55.6	18.5	25.9**	42.3	50.0	7.7	66.7	29.6	3.7	66.7	7.4	25.9
	無	72.7	24.2	3.0	48.5	36.4	15.2	68.8	28.1	3.1	90.9	9.1	0	87.9	0	12.1
偏食	有	33.3	57.2	9.5**	71.4	14.3	14.3	65.0	30.0	5.0	76.2	23.8	0*	76.2	4.8	19.0
	無	60.0	40.0	0	48.0	40.0	12.0	79.2	16.7	4.2	96.0	4.0	0	88.0	4.0	8.0
特定のものを好む	有	53.8	46.2	0	46.2	15.4	38.5	69.2	23.1	7.7	76.9	23.1	0	46.1	23.1	30.8*
	無	74.1	25.8	0	44.4	37.0	18.5	73.1	23.1	3.8	96.3	3.7	0	81.5	3.7	14.8
咀嚼	有	27.3	63.6	9.1	54.5	27.8	18.2	54.5	27.3	18.2	63.6	27.3	9.1	90.9	0	9.1
	無	65.4	30.8	3.8	59.6	26.9	13.5	62.7	33.3	3.9	78.8	21.2	0	86.8	3.8	9.4
のろ食べ	有	21.4	71.4	7.1*	50.0	21.4	28.6	64.3	21.4	14.3	64.3	28.6	7.1	57.1	14.3	28.6**
	無	66.7	31.0	2.4	54.8	28.6	16.9	76.2	19.0	4.8	83.7	14.0	2.3	90.7	0	9.3
小食	有	18.2	81.8	0*	36.4	18.2	45.5**	45.5	36.4	18.2*	63.6	27.3	9.1	45.5	27.3	27.3*
	無	61.9	33.3	4.8	55.6	34.9	9.5	77.8	19.0	3.2	85.9	12.5	1.6	81.3	7.8	10.9

①：「はい」と答えた者の割合

②：「どちらとも言えぬ」と答えた者の割合

③：「いいえ」と答えた者の割合

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

2. 遊び食べについての行動分析

1) 遊び食べの行動分析

2) 遊び食べの意味分析

八倉巻和子 大場幸夫 村田輝子
森岡加代 芦田美保子
大森世都子 高石昌弘

研究目的

幼児期にみられる「遊び食べ」は、子どもの食行動が「一人食べ」から「社会食べ」へと発達していく過程で起こる行動であるから、その後の発育にとって問題となるか否かは十分検討する必要があると考えられる。

本研究は、保育所と家庭における食事場면을観察すると同時にビデオで収録し、子どもの「遊び食べ」行動を中心に、食事の所要時間、手指の機能発達、遊び食べの内容および食事場面における大人と子どもとの関わり等について検討した。

研究方法

1) 対象：対象はJ保育所児のうち保育所および家庭での撮影が可能な1歳児の3名とした。

2) 時期：ビデオの収録時期は1991年5月～9月である。

3) 方法：ビデオの収録日は保育所と家庭の撮影が、できる限り同一日の昼食および夕食であることとし、不可能な場合は翌日収録した。

食事の収録時間は「食べ始め」から「ごちそうさま」の挨拶までとした。

収録は日時やカメラの位置、観察者がいることによる子どもの食行動への影響、カメラへの慣れなどを充分配慮してから行った。

① 保育所での撮影

保育所での撮影は3台のカメラを用いた。

第1のカメラは対象児と保育士や他の子どもの動きが撮れる位置（対象児から約3m）に固定した。第2のカメラは対象児と保育士との関わり、子どもの足元の撮れる位置（対象児から約2m）とし、撮影者自身がカメラを持って撮影した。第3のカメラは対象児の動きや表情、テーブル

にある料理、ちらかし具合などが撮れる位置（対象児から約1.5mでやや斜め上から撮影）とし、撮影者自身がカメラを持って撮影した。

② 家庭での撮影

家庭での撮影は2台のカメラを用いて、対象児と母親との関わりや対象児の動きを、撮影者がカメラを持って撮影した。

以上の方法で収録を行ったが、日常ありのままの食事場면을撮るために何回かやり直し、最終的にきわめて普段に近い状況で撮影することができた。

結果

1) 遊び食べの行動分析

遊び食べの行動分析では、男児（U男）1名、女児（M子、T子）2名の計3名を対象とし、同一条件で食事のできる保育所の昼食について分析した。分析を行った映像は、M子が13カ月と16カ月、U男が14カ月と16カ月、T子が16カ月の時点で収録したものである。

食事の時間を「食べる」行動、「遊び」行動、そして次の行動のための待機や準備の行動などを合わせた「その他」行動の3分類とした。その3つの行動の所要時間、行動内容などについて検討した。

(1) 食事の所要時間

食事の所要時間については、M子の場合は13カ月が12分46秒で、16カ月が22分53秒である。U男は14カ月が23分48秒で、16カ月が25分58秒であり、M子・U男ともに月齢が進むにしたがい所要時間は長くなっている傾向がみられる。

1回の所要時間における3つの行動の割合についてみると、M子の場合、13カ月では「食べる」行動が64.1%、「遊び」行動18.1%であ

り、17カ月になると74.2%・4.7%と「食べる」行動の時間が増加している。U男の場合は、14カ月では「食べる」行動63.0%、「遊び」行動32.5%であり、16カ月になると89.4%・9.6%と「食べる」行動が顕著に増加している。3つの行動の割合は、月齢が進むにしたがい「食べる」行動が多くなり、「遊び」行動が減少している。

(2) 手指の機能発達 (写真1)

対象児の手指の機能発達をみると、M子とT子は14カ月までは片手で食べているのが観察された。16カ月～17カ月になると両手で食べられるようになり、さらにスプーンやフォークを使って食事ができるなど、14カ月以降の急速な発達が観察された。しかし、U男の場合16カ月では両手を使って食べられるが、スプーンやフォークはまだ使えない状態である。

手指の機能発達は、対象児それぞれに異なっており一様ではない。

1) 遊び食べの行動分析



写真 1

(3) 遊び食べの内容

3つの行動の変化と遊び食べの内容について検討するため、食事の所要時間を100%とし、「食べる」「遊び」「その他」の行動の割合をみた。図1～3は、「その他」の行動を中心に上段に「食べる」行動、下段に「遊び」行動の出現状況を示し、さらに、遊び食べの内容を表示した。

M子の場合、13カ月のときは片手で食べており、「食べる」行動が分断されている。16カ月になって両手で食事ができるようになると、「食

べる」行動は集約されてくる。「遊び」の内容については、片手のときは手をふったり、みかんをしばるなどの簡単な行動がみられる。両手が使えるようになると、汁の具をつまんでテーブルの上に出して並べたり、おかずの中身を出し入れするなど「遊び」の行動内容が変化していく。

U男の場合、14カ月のときは「食べる」と「遊び」が短い時間にくり返し行われている。また食事中、保母や他の子の動き、音などが気になるのか、辺りを見渡したりよそ見をするなどの「遊び」行動が度々みられる。手指の遊びとしては、食べ物を手でクチャクチャする行動が多くみられる。16カ月になると片手で食べ物を口に運びながら、もう一方の手でミルクカップを取るなど両手を交互に使うことができるようになる。さらに、ミルクを飲み終わると次の食べ物を取るなど、連続した行動ができるようになる。「遊び」行動はよそ見が少なくなり、指で食べ物をこねたり、器から出し入れするなど複雑な行動に変化している。

T子は16カ月のとき、フォークを使って食事をしているが、フォークで遊ぶ、食器をカチャカチャさせるなどM子やU男と異なった「遊び」行動がみられる。

以上の結果から、「食べる」行動は、月齢が進むにしたがい所要時間が長くなり、「遊び」行動が減少していた。両手で食べることができるようになると「食べる」行動が連続して行われるようになっていた。

「遊び」行動の内容は、片手で食べている場合は簡単な行動であるが、両手が使えるようになると、食器から出し入れするなど複雑な行動に変わってきていた。

幼児の微細運動の発達をみると、15カ月頃には、「つまんで器から出し入れする」や「積み木を積んだり、崩したりする」ができるようになる⁶⁾。対象児の場合も手指の発達にともない細かい行動ができるようになる様子が観察された。また、人が行動を起こすとき準備態勢が必要といわれている⁶⁾が、「遊び」行動は「食べる」行動への準備態勢と考えられる。

16カ月（フォーク）

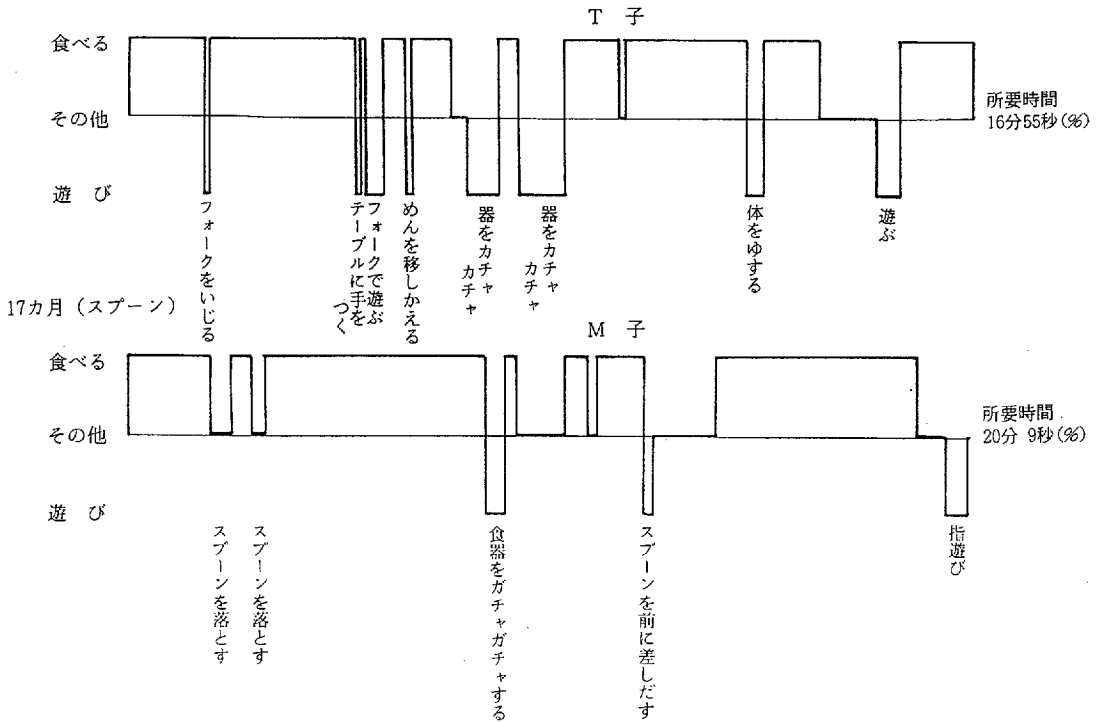


図3 食事時間帯

2) 遊び食べるの意味分析

遊び食べるの意味分析では、食事場面における人、物を軸にした遊び食べる行動の意味の分析を目的とした。

研究方法は、1)遊び食べるの行動分析と同様であるが、対象は1歳児3名について保育所と家庭における普段に近い食事場면을観察すると同時にビデオ収録を行った。

収録された食事場面での子どもの行動を詳細に観察した結果、「遊び食べる」の行動項目について11のカテゴリーを導き出した。

- ① 食べ物をぎゅっと握る。
- ② 食べ物をじっと見る。
- ③ 食べ物をテーブルに置く。
- ④ 口から食べ物を出す。
- ⑤ 食器をひっくり返す。
- ⑥ スプーンで食器をたたく。
- ⑦ スプーンをくわえて遊ぶ。
- ⑧ 食べるまねをする。
- ⑨ 保育者や母親の口元へ、食べ物を差し出す。

⑩ よそ見をする。

⑪ 立ち上がる。立ち歩く。

これらは食事中における遊びの始発行動であり、断片的にはなく、一連の行動の流れを示している。そして、それらが引き金となって別の遊び行動へ発展するという経過をたどると考えられる。子どもの食事場面における様々な状況について、①大人と子どもの相互関係、②物理的な要因における影響、③生活の脈絡から捉えた食事、という3つの視点から分析を行った。

＜大人と子どもの相互関係＞

第1の場面（写真2・3）

食事中子どもが食器の中にある食べ物を、大人へ差し出すという行為があったとき、その行為に対する受け取り方は関わる大人によって様々である。子どもが食べ物を差し出す行為と気持ちに大人が応答的な動作をとっている場合は、実際に食べる・パクパク口を動かして食べるまねをする・手で受け取る・言葉で受け取るなど受け取りの動作や言葉によって返答している。

2) 遊び食べる意味分析



写真 2

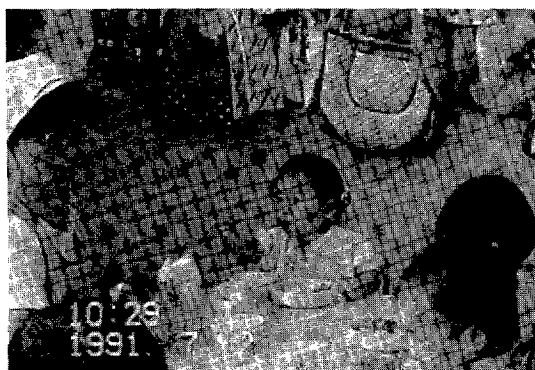


写真 3

そして、子ども自身も、自分の行為に大人が応じていることを認識している。しかし、気がつかない、反応しないなど大人による受け取りがされない場合は、子どもにとって自分自身の行為が受けとめられなかっただけでなく同時に“やりとり”を期待する気持も受けとめられなかったことになる。つまり、子どもの方から大人に食べ物を差し出し、大人がその行為を“受けとめる”とき、そこに「往復の関係」が成立し、子どもが差し出した行為は食べる行動へとつながりやすい。受け取られない場合は、子どもからの「片道の関係」になり、子どもが差し出した行為は、散らかし行動へとつながりやすい。

第2の場面(写真4・5)

散らかし行動には、不注意で落としてしまう・手でいじって遊んでいるうちに落としてしまう・口に入れようとする量が多過ぎるために落ちてしまう・一度口に入れたのに出してしまうなどの行為がみられる。落ちてしまった食べ物の処理について、その都度処理する場合と一斉

に処理する場合があるが、その都度処理する場合は食べ物が落ちた時点で大人と子どもの関わりが生じやすい。それに比べて一斉に処理される場合は、大人と子どもの関わりは生まれにくく、食事と切り離されている。



写真 4



写真 5

第3の場面

子どもが実際に食べ物を口に入れるときの、大人の関わり方については、子どもの気持を優先して大人が援助する場合、食べたい物を指し示して口に入れてもらったり、自分の手にとって食べたい物を要求したりする行為がみられ、子どもの要求に対応して食べさせるやりとりが見られる。大人の気持を優先させて、食べ物を子どもの口元へもっていき促すような場合は、子どもが食べ物を口へ運びたいテンポや食べたい物の順序が考慮されていないため、イヤイヤと首をふったり、口に入れた食べ物を出したりする行動がみられる。

第4の場面

子どもの関わり方の頻度や強度について、特に

食事場面における相互関係を考えるとき、その位置関係が重要になってくる。対象児の食事場面について、保育所と家庭の位置関係のパターンを示すと図5のようになる。大人と子どもが対座する場合や、隣に座る場合、またその距離などによってもその対応は変わってくる。例えばテーブルで対座すると、テーブルをはさんでのやりとりになったり、隣に座ると目と目を合わせてのやりとりが少なくなったりする。したがって、食事時の大人と子どもの関わりの頻度や強度はその位置関係によっても違いが生ずる。十分に関わり合っている場合の子どもは、余裕をもって食事を進めている様子が観察される。

＜物理的な要因による影響＞

食事時の活動の自由度は、子どもがどのような状態で食事をするかによって、大きく左右される。例えば、背もたれのついた椅子に子どもの身体を隙間なくつけて座らせると、子どもの身体は椅子とテーブルに挟まれるかっこうになる。その上子どもの足は床に届かないため不安定な状態になり、自由度はかなり小さくなる。

一方、椅子の上に乗っていたり、足が床に着いている場合は、身体が安定しているため横をむいたり、立ち上がったたりすることができ、食事時の活動の自由度は大きくなっていく。

このように食事時の子どもの活動範囲が広が

りをもってくると、食事をするという行為が遊びを含んだ食事行動に変わってくる。言い換えれば、食事時の活動の自由度が大きければ、遊びのきっかけになる人や物と触れ合う範囲が広がり、食べる行動から遊び行動へと移行しやすい状況が生まれる。

しかし、姿勢や動きなどが固定され、制約された場合には食事の行動が狭められ、その結果食事の心理的な意味も狭められることになる。

食事中、子どもの周囲にある物との関係においても同様のことが考えられる。食事をしているときの子どもの目には、自分の食器の中にある食べ物や、窓の外に見える木や、たんすの上に飾ってある絵など、様々な物が映っているはずである。しかし食事をしている子どもが実際に手を触れられる物、自分に引き寄せられる物という、それは子どもの手が届く範囲内にある物に限定されてくる。食事中、子どもの手が届く範囲に、食べる行為に必要な物が一切置かれていない場合、食事をするためにのみ設定された場になり、実際に手で触れることのできる食べ物や食器が遊びのきっかけを作る物になる。

一方、食べる行為に直接的な関わりを持たない物が子どもの手が届く範囲に置かれている場合、遊びの世界を含んだ食事の場となってくる。

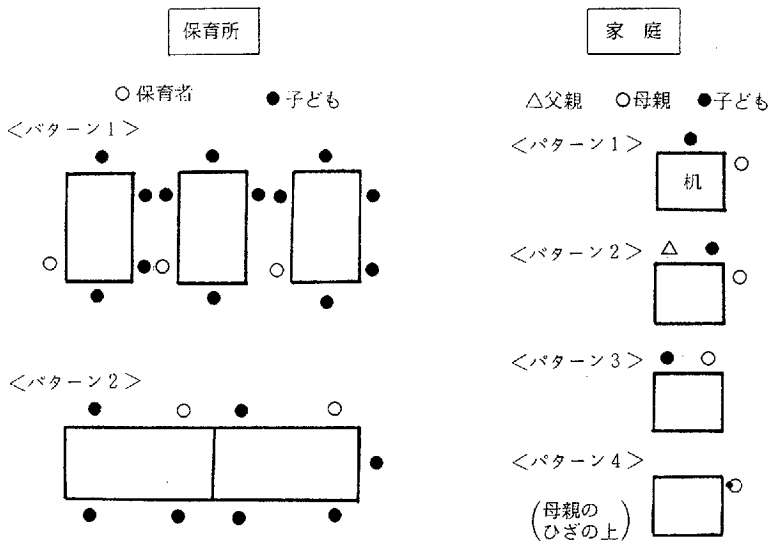


図5 大人と子どもの位置

例えばぬいぐるみを食卓に乗せて、「くまちゃんも一緒にたべようね」と言葉をかけたり、「はい、くまちゃんのコップね」といって牛乳を入れたりすることで、遊びのきっかけとなる物が食べることへの方向づけとなっている。

つまり遊びのきっかけとなる物は、その働きかけによっては食べるきっかけとなる物とも捉えられ、その食事に関わる大人の働きかけ次第で、相反する2つの要因を持っていると考えられる。

＜生活の脈絡から捉えた食事＞

食事は生活の流れの中で行われており、大人が子どもに対してははっきりと区別して食事時間を捉え、食前・食事中・食後と区切っている場合と、はっきり区別していない場合がある。

区切りがはっきりしている場合は、食前は遊びの時間で、食事の準備が整うのを見計らって遊びを止め、子どもの前に食事が置かれる。子どもにとっては食べる行動がいきなり始まり、食事中は食べることのみ時間となる。食後はまた遊びの時間にもどり、食事は生活の流れの中で孤立したものになっている。区切りがはっきりしていない場合は、食前に食事を食卓に運ぶなど食事の準備をしている時間、子どもは遊びながら食事を待っているが、大人はすでに食事の時間として捉えており、食前・食中・食後がすべて食べることを主体とした食事時間であるため、子どもにとっては食事に前ぶれと食事と余韻があり、食事は生活の流れと共に存在している。つまり、食事について食前・食中・食後という区切りを大人が厳密にするかどうかで、子どもの食事への関わりは異なったものになる。

以上のように、遊び食べ行動を人や物との関わりで捉えること、生活の脈絡の中で捉えることの意義を確認することができた。

考 察

幼児期における食行動は、哺乳に始まり、自分で食べることができるようになり、さらに社会的意味を持った食べ方に発達する。そのためには、諸機能が発達してそれぞれの食行動を特徴づけていくといわれている。それらは、生理

的・心理的発達をとめない、やがてその食行動は社会性をもって食習慣や食生活に適応していく⁷⁾。

特に今回対象とした1歳児は、「吸う」から「食べる」行動へと、咀嚼機能を備えると同時に、手先の協応動作も発達して「一人食べ」が可能になる時期である⁷⁾。さらに子ども同志の相互交渉ができる「社会食べ」へと発達する前段階である。これらの摂食行動の発達には、すべて生理的成熟と同時に、正しい食べ方の学習が必要であり、そのためには大人との関わり方や援助の如何が問題となる。

本研究では、幼児の順調な発達を促す上から、この時期に母親から問題とされることの多い「遊び食べ」の実態を詳細に把握するため、食事環境や大人との関わりについて、ビデオによる行動分析を試みた。

その結果、月齢が進むにしたがって食事時間が長くなる傾向がみられた。月齢が低いときには完全に「一人食べ」ができないため、養育者がスプーンで口に入れるなどの援助がみられたが、月齢が高くなると、養育者の援助を拒否するなど、一人で食べようと努力する様子が観察され、食事にかかる時間が長くなっていく。また、月齢が進むにしたがって「食べる」「遊び」「その他」の3つの行動のうち、「食べる」行動の割合が増加し、「遊び」行動が減少する傾向がみられ、「遊び」行動の内容が変化していく様子が観察された。この時期、対象児は片手・両手・またはスプーンやフォークを持つなどしているが、いずれにしても食事は手づかみの状態であった。「遊び」行動としては、つまむ・こねる・手をふる・食器から食器へ食べ物に移すなどの手指の機能や^{8) 9) 10)}、指差し・なで廻しなど心理的発達をとめなう行動¹¹⁾、そしてわざとこぼす・食べ物を差し出すように養育者の関心を自分に向ける行動など、月齢が進むにしたがって複雑な行動へと変化している。「食べる」行動は、諸機能の発達にとめない、自分で上手に食べられるようになると食べることが継続するため、時間的にも集約されて食べ方も意欲的になってきている。

また、遊び食べの意味分析において、遊び食

べ行動を人や物との関わりで捉えた結果、人や物はその食事に関わる大人の働きかけ次第で、相反する2つの要因を持つことがわかった。

したがって子どもが次の行動のための待機や準備をしている「その他」の行動に対し、養育者がどう対応するかによっては、「食べる」行動が継続するか、または「遊び」行動に変わるかが決定されることも考えられる。さらに、食事を生活の脈絡の中で捉え、子どもの生理的成熟に合わせて、養育者が適正な援助を与えながら学習を繰り返すことが必要であると考えられた。

以上、「遊び食べ」は必ずしも問題となる行動ではなく、保健指導の際に養育者が子どもの発達の状態をよく観察しているか、また適正な援助がなされているかなどを確認するよう、指導することが必要であると考えられる。

文 献

- 1) 八倉巻和子ら：食行動からみた養育条件と発達に関する研究，厚生省心身障害研究平成元年度研究報告書，114-119，1990.
- 2) 八倉巻和子ら：食行動からみた養育条件と発達に関する研究，厚生省心身障害研究平成2年度研究報告書，117-135，1991.
- 3) 高野 陽：乳幼児健診と保健指導，医歯薬出版，211，1988.
- 4) 武藤静子：小児栄養のすべて，幼児栄養，金原出版，158，1983.
- 5) 上田礼子：発達検査と発達援助，別冊発達8，ミネルヴァ書房，153-164，1988.
- 6) 荘巖舜哉・根ヶ山光一編著：行動の発達を科学する，福村出版，31，1990.
- 7) 二木 武：小児の発達栄養行動，医歯薬出版，1-39，1984.
- 8) A・ゲゼル：乳幼児の発達と指導，家政教育社，117-190，1983.
- 9) 斎藤公子：手のうごきと脳のはたらき，築地書房，142-163，1991.
- 10) 澤 文治：1・2歳の発達と保育，教育出版，59-75，1984.
- 11) 三木成夫：内臓のはたらきと子どものころ，築地書房，114-125，1988.

Abstract

Studies Concerning the Bringing up Conditions as Seen from the Eating Behaviors and Development

1. Relationship between Eating Behaviors and Bringing up Functions in Infancy
2. Behavior Analysis of Playful Eating

Kazuko Yaguramaki, Yukio Ohba, Teruko Murata, Kayo Morioka,
Mihoko Ashida, Kiyoko Mizuno, Setsuko Ohmori, Masahiro Takaishi

1. Relationship between Eating Behaviors and Bringing up Functions in Infancy

A survey with the questionnaire was performed in 159 mothers who had a child aged between 1 year and 6 months and 1 year and 10 months to examine their complaints about any eating behavior and to clarify the relationship between complaints and rhythm of life, child's emotion and mother's bringing up functions.

- (1) The percentage of those who had no complaint about any food problem was 22.0%, while the remaining 78.0% had some complaints.
- (2) The items of complaints were in the order "playful eating", "irregular eating", and "deviated food habit".
- (3) Those with unstable rhythms of life and eating had more complaints.

- (4) Those who had no complaint were stable in terms of emotion.
- (5) Mothers' bringing functions affected the number of complaints.

2. Behavior Analysis of Playful Eating

For the purpose of analyzing playful eating in infancy, eating scenes were observed and recorded on videotape to analyze their behavior and their meanings.

1) Behavior analysis of playful eating

Eating behavior was classified into three groups – “eating”, “playing”, “other behaviors” – and the length of each behavior was examined.

(1) The relative time of “eating” behavior increased with age, while that of “playing” behavior decreased.

(2) Concerning the development of hands and fingers, 2 of 3 subject children ate with both hands and they could use spoon and fork, while the remaining one child could eat with both hands but could not use spoon nor fork.

(3) As for “eating” behavior, when children were eating with one hand, “eating” behavior was divided into sections. Whereas “eating” behavior was integrated when children became to be able to eat with both hands.

(4) As for “playing” behavior, actions such as waving hands and looking aside were observed when children were eating with one hand. When they became to be able to eat with both hands, such behaviors were observed as pinching, kneading, taking food in and out of the plate.

2) Semantic Analysis of Playful Eating

<Interrelationship between Adult and Child>

(1) When an adult gave some food to a child, it might lead either to eating behavior or to scattering behavior depending on the adult's response.

(2) If fallen food was disposed as soon as it fell, an interrelationship was produced between adult and child. If fallen food was left as it was and disposed all at once after meal, the disposing behavior was separated from eating behavior and it was difficult to establish any interrelationship.

(3) If child's wish was respected when putting food into the mouth, adult was apt to help child eat by responding adequately to the child's request. If adult forced child to eat, child was observed to shake his/her head in refusal or vomiting food.

(4) The frequency and intensity of interaction between adult and child were affected by the sitting position.

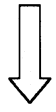
<Influence of physical factors>

(1) If posture and motion during eating was not restricted, eating behavior easily moved into playing behavior.

(2) If there was anything which had no direct relation with eating and could be an opportunity of playing, actions to child by adult might be an orientation to eating.

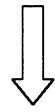
<Eating seen from the standpoint of life>

Whether adult strictly make distinction between “before eating”, “during eating” and “after eating” might affect child's attitude to eating.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:

1. 幼児期にみられる食行動と養育機能との関係

1歳6ヵ月から1歳10ヵ月児を持つ母親159名を対象に、食事行動に関する訴えの実態を調査し、生活リズム、子どもの情緒および母親の養育機能との関連づけを試みた。

食事に関する訴えが全くない児は22.0%、何らかの訴えを持っている児は78.0%である。

訴えのうち、遊び食いが最も多く、次にむら食、偏食である。

生活・食事リズムの不安定な者に、訴え率が高い。

訴えが全くない児は情緒が安定している。

児の訴えの発現に母親の養育機能が影響を及ぼしている。

2. 遊び食べについての行動分析

幼児期にみられる遊び食べの行動を分析するため、保育所と家庭における食事場面を、観察すると同時にビデオで収録し、行動の分析と意味の分析を行った。

1) 遊び食べの行動分析

食事時間を「食べる」「遊び」「その他」の行動に分類して検討した。

1回の食事の所要時間は、月齢が進むにしたがい「食べる」行動に要する時間が長くなり、「遊び」行動は減少している。

手指の機能発達については、16ヵ月時の対象児3名のうち2名は両手で食べ、スプーン・フォークが使える。1名は両手で食べられるがスプーン・フォークを使えない。

「食べる」行動については、片手で食べているときは「食べる」行動が分断され、両手で食べられるようになるとその行動が集約する。

「遊び」の行動については、片手で食べているときには、手をふる、よそ見をするなどがみられる。両手で食べられるようになると、つまむ、こねる、食器から食べ物を出し入れするなどがみられる。

2) 遊び食べの意味分析

大人と子どもの相互関係>

子どもから大人に食べ物を差し出したとき、大人の受け止め方如何によって、食べる行動につながったり散らかし行動につながりやすい。

落とした物をその都度処理する場合は、大人と子どもの関わりが生じ、一斉に処理する場合は、関わりが生まれにくく食事と切り離される。

子どもが食べ物を口に入れるとき、子どもの気持ちを優先する場合は、子どもの要求に対応して食べさせるやりとりがみられる。大人の気持ちを優先する場合は、子どもは首をふっていやがり、食べた物を出したりする行動がみられる。

大人と子どもの関わりの頻度や強度は、食事中の座る位置に影響される。

<物理的な要因による影響>

食事中の姿勢や動きなどの活動が自由な場合は、食べる行動から遊び行動へと移行しやすい。

食事の場に、食事と直接関わりはないが遊びのきっかけとなる物があった場合、大人の働きかけによって食べることへの方向づけともなる。

<生活の脈絡から捉えた食事>

食事について、食前・食中・食後という区切りを大人が厳密にするかどうかで、子どもの食事への関わりの幅は異なったものとなる。